

欧米に於ける日本史研究の現状と動向

今 谷 明

はじめに

日本をとりまく国際関係は複雑で、しばしば歴史認識をめぐる紛議が持ち上り、外交の一部にも混乱が見られることは誰も否定し難い。問われているのは日本側の歴史認識であることが多いが、一方で諸外国が日本の歴史をどのように理解しているか、それを日本人が正しく認識していることも重要である。このように規定してみたところで、外交上の問題は感情的な国民思潮、およびマスコミの報道姿勢といった要素も絡み、問題はしかく簡単ではないけれど、右の問題を考える手段の一つとして、諸外国に於ける日本史研究の現状を俯瞰^{ふかん}してみたい。たまたま、筆者の兼任する日本学術振興会の学術センター（筆者の立場は専門調査員）に於いて、文部科学省からの依頼で十年一度の恒例の学術動向調査を実施している。その中で、

諸外国の当該学術部門の動向把握も併せて依頼されており、この機会に若干の外国人研究者へのヒアリング（聴取調査）を行った。

筆者はもとより、こういった部門に専門の者ではなく、不慣れな聴き取りと幾つかの文献に当たったにすぎないが、諸外国で日本史研究上、何が問題になっているかというホットなテーマに接近する一つのよすがにはなるかも知れない。ただし、諸外国といっても世界全般にこの種の調査を行うことは、筆者の菲才^{ひさい}といい、時間、予算の制約といい、到底よくなしうることではない。そこで、便宜上、日本研究が伝統的に最も盛んな国であるアメリカ合衆国を中心に、西欧諸国ではフランス、オランダ、ドイツを加え、以上米、仏、蘭、独の四ヶ国について若干の考察を加えることで、お茶を濁すことをお許し戴きたいと考える。以上の調査に関し、筆者の属する国際日本文化研究センターのJ. C. Baxter教授、M. Rittermann助教、

来訪研究員のA. Vesey教授、及び総合研究大学院大学院生Hayek Matthias (ハイエク)君の諸氏から多大の便宜と御助力を与えられたことを申し添えておく。

(一) アメリカ

アメリカに於ける近年の日本研究について総括したものに、国際日本文化研究センター(以下完名引用の繁を避けて「日文研」と略す)G.J.C. Baxter教授によるRecent Trends in Japanese Studies in the United States of America(米合衆国に於ける近年の日本研究の推移)という報告がある。同教授が、二〇〇六年春にポーランドの国際集會に於いて発表されたレポートで、いずれ同地の学界誌に英語で公刊されると承っているが、邦訳はない。また、平成一四年(二〇〇二)にペリカン社から公刊された『季刊日本思想史第六一号』では、「アメリカの日本研究——現在、未来」と題して特集を行う。A. Gordon教授(ハーバード大、筆者が直接聴取した研究者、後述)の「日本研究を真面目に考える」やM. William Steele氏(日本ICU教授)の「一九九〇年代の日本思想史——近代性・ナショナル・アイデンティティ・現代」などの、大変興味深い論考が収められている。

また、個別分野に関する回顧として、H. Ooms教授(カリフォルニア大ロサンゼルス校UCLA)による「アメリカにおける日本近

世思想史研究——回顧・展望・比較——」(東大史料編纂所『前近代日本の史料遺産プロジェクト研究集會報告集二〇〇三』)がある。この他、UCLAの院生David君の教示によるものだが、数年前日本の学界誌にオハイオ州立大のP.C. Brown教授がアメリカに於ける日本近世史について「アメリカにおける日本近世史研究の動向」(谷口真子氏訳『日本史研究』四五三号 二〇〇〇年五月)と題して論述されている。以上のような近年のアメリカ研究者による労作を参照し、また筆者が実地に行った聴き取り調査によって、最近のアメリカ学界での日本史研究の動向といったものを、以下にまとめてみよう。

一、近代史

日文研のBaxter教授による総括は、氏の専門が近代史であることもあり、日本の近代、現代史が中心となっている。

氏は、「あくまで最近三年間の傾向、推移に限り、しかも個人的興味を引いたものを主に取り上げた」と断りをいれつつ、次のようにまとめられている。まず大別して次の三つに近年の学界の関心が集まっているとして、

① ジェンダー(性差)研究

② 植民地、帝国 Colonialism問題に関するもの

③ 大衆文化 Popular Cultureに関するもの

を指摘される。①については、全米の大会、地方学会、大学ゼミ等の約半分くらいがこれに関連するテーマで占められているのではないかとする。さらに氏は、ジェンダー研究を次の三項に大別して説明する。

a 日本に於ける女性の地位とその特殊性

これへの関心は、実は従来からあった。例えば、サンタクララ大学の Barbara Molony 女史の市川房枝の研究（近代と女性の地位）の如きものである。⁽²⁾

b 同性愛の研究

これは日本に於ける氏家幹人氏の研究（男色と武家社会）等が影響を与えているらしい。男色の他、女性同士の愛（レスビアン）、明治大正の女性同性愛等も含む。コロンビア大準教授 Gregory M. Pflugfelder 氏の「The Satsuma Habit: Stinging Male-male Desire in Meiji Japan」などがこの方面の典型であろう。

c 女性の穢れの問題

Tonomura Hitomi 女史（ミシガン大）の研究⁽³⁾に見られるが、出産、月経による女性の血の穢れの問題は、日本独特の根深いもので、柳田民俗学への批判を含む、出産と穢れの問題が、一部の女性研究者の関心を集めている。

次に②について。この問題については、次の二項に分類できると

いう。

a 内地への影響、外地と内地の対比研究

かつては、一方的に植民地側への動き、影響というものに関心が集まっていたが、冷静に外地と内地を比較し、検討するというのが最近の傾向のようである。満洲国の状況を描いた日本での山室信一氏著『キメラ』（中公新書）や、山口昌男氏の『挫折の昭和史』（岩波書店）等の業績も、多少は影響や刺激を与えているのではないかと思われる。

b 朝鮮人、台湾人のアイデンティティーの研究

植民地に於ける、支配者日本人でなく、被支配者である朝鮮人⁽⁴⁾、台湾人の自己同一性の問題というのは、欧米に於ける植民地研究の近年の特色のようである。サイド著『オリエンタリズム』の視点も微妙に交叉しているようである。この面で活躍するのは文学系の研究者のようである。例えばニューヨーク大研修員の Kota Inoue は中島敦の『虎狩り』を対象に朝鮮に於ける日本のコロニアリズムの問題に接近しようとする。

次に③の大衆文化、Entertainmentの問題について。この分野は、近年の日本による唯一の海外発信型、輸出型文化のテーマであるだけに、活況を見せている。大別して

a 漫画、アニメーション

b 宝塚歌劇

c 演歌、ジャズ

に分けられる。a～cを対象とする研究者は文化人類学者が主導しているようであるが、歴史学プロパーの研究者も参入している。イリノイ大シカゴ校のAtkins教授は一九二〇年代以降に於ける日本の大衆音楽を博士論文で書き、専ら日本のジャズ流行についてテーマとする。もつともこの方面で注目されているテキサス大のSusan Napier女史は「モノノケ姫」や「ハウルの動く城」等の最近のアニメ映画を題材に取上げている。ハワイ大マノア校のChristine R. Yano准教授はカワイイ系の、ハローキティのような大衆嗜好を扱っている。日本でかかるテーマが歴史学の題材となり得るかは疑わしいが、彼女は以前は戦前の演歌を研究する人類学者であったという。

以上、Baxter教授のまとめによると、アメリカに於ける日本近代史研究の現況、近年の傾向は、以前とはかなり様相を異にしているとみられる。従来の主流であった、政治、経済史、あるいは外交史、労働運動史等は、研究が皆無でないとはいえ、目立たず、流行でもないようである。アメリカは日本の学界、あるいは大学等と就職制度が異っており、業績主義が厳格であることもあって、「目立つ」業績をあげなければ若手研究者の就職が困難であるという。勿論、大学院重点化によって日本でも業績主義が最近では激化しているが、「目立つ」業績については、日米で相当の相違があるようである。

ある。

なお、筆者がハーバード大学歴史学部長のAndrew Gordon教授から直接伺った話によれば、二、三十年前と比べて、アメリカの日本史研究は、(とくに近代史であるが)方法も日本の史料を直接読み込んだ上で立論し、水準が日本人の研究と比して遜色がなくなり、同じレベルに達してきているのではないかと自信を持っておられた。特殊な分野、例えば栗山茂久教授(二〇〇五年に日文研からハーバード大学に転任された)によると、日本医学史に関しては、アメリカの方が遙かに進んでいると語っておられたのが印象的である。

また、Gordon教授自身の研究対象の変遷も興味あるものである。氏は、かつては労働運動史の専門家であった。しかし近年は、一九〇〇年～一九六〇年の期間内に於ける中産階級の消費生活に関心を示され、業績とされている。その方法も、ピアノ・ミシン・ラジオ等耐久消費財に焦点を当て、分析されている。広い意味での生活文化史であると思うが、私にはフランスのアナール学派の刺激や影響も若干はあるのかと推測した。

二、近世史

米合衆国に於ける近世史研究は、近代史に次いで研究者の数も多く、米国人による総括も幾度か発表され、うち和訳されているものも幾つかある。⁽⁶⁾文化人類学者ベネディクトの『菊と刀』は別として、

戦後の米国に於ける日本史とくに近世史研究は、J・ホールや、M・ジャンセン、E・ライシャワールの所謂「近代化論」の枠組みに属する研究から始まったといわれ、これらの潮流が、ベトナム戦争の終結とE・S・サイードの『オリエンタリズム』の出現によって破綻したという評価が一部にある。前注(6)で紹介したJ・F・モリス氏、フィリップ・C・ブラウン氏らはその立場のようであるが、後者は近代化論批判の動向を指摘されながらも、その姿勢は前者ほど厳しくなく、微妙な立場の差が感ぜられる。アン・ウォルソール氏の総括を見ると、近代化論への「疑義・無視」の立場が出てきたとするも、評価は避けておられる。筆者のみるところ、近代化論は近年は優勢とは言えないにせよ、その破綻、全否定も必ずしも自明とはいえなくなったのが実情と推測される。

さてアメリカの戦後の研究状況の特色は、他地域(諸外国)と比較して、圧倒的な日本史研究者の数である。J・F・モリス氏は一九八四〜八八年の四年間在米したが「日本」と名のつく授業に学生が殺到する¹⁾状況を回顧されている。しかし近年は日本史研究者の数は横這いで、学生の熱気は中国研究に移っているようである。

モリス氏が観察した七、八十年代の研究状況は間引き普及などの歴史人口学、百姓一揆等がテーマとして特筆されている。²⁾しかし、十年後のC・ブラウン氏の総括によると、一揆を含む民衆運動の分野の割合は、研究書が四／三六、論文は〇／四四という状況で、一

揆研究は一時の短期流行に留まっている。⁽⁸⁾

それではブラウン氏の総括(二〇〇〇年当時)する近世史研究の特色とは何か。氏は、

A 近世近代移行期の研究

B 近世史の研究

に二大別され、Aの特徴は、下伊奈、蝦夷地等一定地域の一九世紀を通じての経済研究という面であると指摘され、研究者としては、W.G. Beasley, Wigen, Karen, D. Howell等の諸氏を列挙されている。Bの一般近世史ではブラウン氏は思想史を重要ジャンルとして言及されているが、それは後掲(別の一項)で取り上げることとし、思想史以外の特色ではJ. White氏の災害³⁾一揆研究、G.M. Wilson氏の幕末維新研究を特筆されるほか、Baxter氏前掲G.G.P. Leupp氏の男色研究⁴⁾、C. Tottman氏の森林保護等生態学的研究が列挙されている。なおブラウン氏は政治史の研究として上智大のK. ナカイ氏、UCCLAのHerman Ooms氏の業績を上げているが、ナカイ氏は本稿では日本の研究者として扱い、Ooms氏の論文は後述する。

三、近世思想史

この分野は米国研究者の業績が比較的早くから日本で評価されており、研究者の層も厚く、米国の日本研究の中で独自の存在感を見せ

ている。研究史の回顧としては、前掲の諸論文のほか、H. Ooms氏「アメリカにおける江戸思想史の三十年を顧みて」(『日本思想史学』三三号二〇〇一年九月)がある。

現在も現役で活躍中のH. Ooms教授は、もとベルギー出身の宣教師として来日され、日本史研究に転向して東大の大学院に学び、徳川幕藩制の成立を国家権力の威圧として捉え、ポスト構造主義の理論をも踏まえながら、独自の「徳川イデオロギー」なる概念を措定された。一九八五年のことで、従前思想史の中心であったシカゴ学派からの自立を宣言する著作を公表した。⁽⁹⁾その後Ooms氏はブルデューの社会学理論を援用し、信濃の天領村落を対象に階級、身分、権力、法の相互関係を論じた。⁽¹⁰⁾筆者は二〇〇六年夏にUCLAに於いてこの碩学に直接面談の機を得、種々興味深いお話を伺ったが、現在はOoms教授は近世史を離れ、一転して古代の宗教史、陰陽道の研究に専念されているということであった。氏に限らず、水戸学のKoschman、国学のHarootyan、山県大武のWakabayashiや近世思想家の多くが昭和史、戦後史に転じ、Ooms氏自らは古代の陰陽道に関心を移しておられる。⁽¹¹⁾

四、古代・中世史

今回の訪米で筆者はハーバード大学歴史学部准教授のM. S. Adolphson氏に面会し、また氏の紹介で南カリフォルニア大学の教授J. R.

Piggott女史にもお会いすることが出来た。また女史の紹介により、UCLAの院生D. A. Eason君とも話が出来、米国の古代中世史学の概略を知ることが得た。これと日文研Baxter教授作成の近年の学会発表リスト等から知られた筆者の知見を以下に記してみたい。Adolphson氏はスエーデンの出身で同国の大学には日本史の講座は一切無かったそうである。氏は故国に在国中、トヨタ等日本車の進出で日本経済の興隆を目の当りにして日本史を志し、渡米し、また来日して京都大学にも学び、日本中世史では米国内で最も意欲的な活動が続いている新進の研究者である。この点では、やはり日本史の講座の無かったベルギー出身のOoms教授とやや似ており、アメリカンドリームを学問の世界に於いて地で行く成功者とも言えそうである。

Adolphson氏の著作は『権門——前近代日本に於ける僧侶、公家、武士』⁽¹²⁾で、主として鎌倉時代を対象とした国制、社会構造の分析である。筆者は氏と鎌倉初期の貨幣流通の問題を議論し、中世日本で独自の銅貨鑄造がなかった理由、承久の乱が銅貨流通に決定的役割を果たしたこと等について話し合った。

南カリフォルニア大のPiggott教授は、米国では数少ない古代、中世史を専門とする歴史家で、東大史料編纂所には幾度も留学され、日本の学界の事情にも詳しい。⁽¹³⁾王権の形成、発達と寺社勢力の関係に関心があり、筆者の名も以前から存じておられた。教育にも熱心

で、院生の養成に強い使命感をもっておられる。日本からの女性の博士課程院生も抱えておられ、筆者も短時間だが直接面談した。

以上のように、筆者はアメリカに於いて、二人の研究者と面談したのであるが、UCLAにOoms教授を訪ねたさい、同大学院生のDavid A. Eason氏を紹介され、後日たまたま来日した同氏と面談して、右の二氏(アドルフソン氏とピジョー氏)以外の全米に於ける古代中世史研究者について概観することが出来た。以下に氏名、所属大学名、研究テーマの順に列挙する。

Thomas D. Conlan (ボードウィン大) 十四世紀(南北朝期)の戦争
Lee Butler (Brigham大) 公家社会に於ける贈答慣行

Chari Pradel (加州Polytechnic大) 鎌倉期に於ける太子信仰

Kenneth Lee (加州大Domingues校) 親鸞に於ける太子信仰

William Londo (フロリアアトランティック大) 十世紀末法思想と社会

想と社会

Candice F. Kanda (ハーバード大) 法然に於ける来迎イメージ

Suzanne Gay (オバーリン大) 中世後期の仏教と社会

Sayoko Sakakibara (スタンフォード大) 聖徳太子伝暦と王権

Mark Blum (ニューヨーク州立大アルバニー校) 法然に於ける末

法觀念

Yui Suzuki (DCLA) 平安期の仏教美術

Karl Friday (シエラリア大) 中世前期の戦争

H. Paul Varley (ハワイ大マノア校) 中世史

Andrew E. Goble (オレゴン大) 石山本願寺の共同体

David D. Neilson (オレゴン大) 前野家『武功雜記』の信憑性

Gene E. Phillips (ウィスコンシン大) 逆修の仏教文化

以上を通観すると、その過半以上が仏教史に関するテーマであり、他には戦争論、儀礼関係が目立つ程度で、何といっても仏教への関心が注目され、この辺が近世近代史研究と大きく相貌を異にする点である。

(二) フランス

この国の学界動向については、総合研究大学院大学国際日本研究専攻博士課程に在籍するフランス人研究者ハイエク君(日本の陰陽道史を研究)に調査を依頼した。筆者は直接訪仏して裏付けを行った訳ではなく、本項は全面的にハイエク君のレポートに依拠したものであることをお断りしておく。

まず、少々長い引用となるが、ハイエク君による仏日本史学界の概観を次に示す。

現在フランスでは、日本史研究そのものが盛んであるとは言いがたい。古代史、中世史、近世史、近代史、現代史といった日本史学の区分の一つに焦点を当て、集中的に行われている研

究は極めて少ない。中でもとりわけ伝統ある古代史と、実用的な側面を持つ近代・現代史に関する研究が多い。

それはやはり、東洋研究全般が地域研究に分類され、中国研究、日本研究などの枠組みの中で活動している研究者の間で、歴史研究者が少ないということになる。

しかしながら、その一方、歴史学の範疇を越えた諸現象史研究が盛んに行われている。要するに、ある文化地域の歴史を通して、その文化の一部分にテーマを絞り、その歴史を描こうとする研究である。政治史・経済史・科学史等は代表的であるが、近年、メディア史研究なども行われるようになった。⁽¹⁵⁾

以上のように、ハイエク君の総括によれば、フランスに於ける日本史研究はやはりメジャーなものではない。元来フランスは、西欧に於ける東洋学の中心であり、とくに中国研究については質量とも定評があるが、日本史研究は、所謂ジャポニズム等の興隆期を例外として、関心は比較的薄かったとみられる。また日本の戦後史学界全体としては、アナル学派の手法の導入等、フランスからの影響は一定程度みられたとはいえ、マルキシズム優勢下の日本の学界からの対西欧への発信といったことは少なく、一方的な片道交通だったのではないか。ただし、ハイエク君の例にもみられるように、現在のフランスでは、修験道、陰陽道等、特殊な日本の宗教に対する関

心は決して低くはなく、今後の展開も期待される。ともあれ、ハイエク君の調査によって列挙された「フランス日本研究学会会員」で、広い意味での日本史研究者を以下に紹介してみよう。

Akamatsu Paul(元仏国立科学研究所 主任)十七〜十九世紀の日
本近世史

Bellevaline Patrick(現同右 研究所 主任)幕末明治期の沖縄史と

民族学

Debergh Minako(現 同右 研究所)近世日欧交流史、地図製作

法の比較

Fièvre Nicolas(現 同右研究所) 日本建築及び都市計画史

De Touchet Elisabeth(リール第一大 助教授)近代工業(造船)

史技術史

Galan Christian(トゥールーズ第二大 助教授) 日本教育史

Hamon Claude(パリ第七大 助教授) 会社史、財閥・系列等の

研究

Horiuchi Annick(同右大 教授) 近世科学史

Hérail Francine(元仏国立高等学院 主任) 平安貴族社会史

Von Verschuer Charlotte(現同右学院 主任) 平安鎌倉時代史

Kouané Nathalie(国立東洋言語文化研究院 助教授) 近世宗教

(巡礼等) 史

Lucken Michael(同右研究院 助教授) 近現代美術、戦後史

Souyri Pierre (同右研究院 教授) 日本中世史

Thomann Bernard (同右研究院 助教授) 現代史、労働社会史

Vie Michel (元 同右教授) 前近代政治社会史

Lévy Christine (ボルドー第三大 講師) 二十世紀イデオロギー、

政治思想、女性史

Nanta Arnaud (国立科学研究所) 人類学、考古学史、近現代史

Sabouret Christophe (国立極東学院) 現代社会史(教科書問題等)

Schall Sandra (ストラスプール第二大 講師) 近現代社会史、女

性労働史

Ségy Christiane (同右大、助教授) 幕末近代のメディア、コミ

ュニケーション史

Pons Philippe (ル＝モンド紙 記者) 近世日本の裏社会、現代政

治

Carre Guillaume (社会科学高等研究院 助教授) 近世社会史、経

済(貨幣)史

以上二二人を以て時代別に分けると、近現代史二二人、近世史七人、古代中世史三人となつて、やはり江戸時代史以降の研究が圧倒的である。しかし、その中で流石にフランス人の研究ならではと感心させられる研究対象がある。すなわちヤクザ等裏社会の研究、教科書問題からみた日本社会等であつて、ここにはアメリカ人研究者にはみられない、深く掘り下げた日本社会の研究という視点がみ

られる。

さて、寥々たる古代史中世史研究の中にあつて、ハイエク君の調べてくれた「最近の日本史に関する書籍」のレポートをみると、注目すべき出版がある。その研究者名に掲げた Hérail Francine 氏による *Notes journalières de Fujiwara no Sakefusa, Traduction du Shunki* (一〇四〇-一〇五四), tome 2 (dernier) であつて、これは王朝時代の公卿日記『春記』の仏訳である。また、国立高等学院 Von Vershuer Charlotte 氏他編になる *Eloge des sources, Reflets du Japon ancien et moderne* は、⁽²¹⁾ 古代、中世に関する研究を収録した論文集であるといふ。さらに前掲の Hérail Francine 氏には *Gouverneurs de Province et guerriers dans les histoire qui sont maintenant du passé, Konjaku monogatari shū* なる著作がある。⁽²²⁾ 『今昔物語』を用いて国司と武士の関係を論じたものである。

(三) オランダ

オランダに於ける日本研究は世界最古の歴史を持つ。フォン・シーボルトの蒐集将来する膨大な日本資料の蓄積を基礎に、ライデン大学に日本語学科が置かれたのは一八五五年のことで、初代学科長はシーボルトの弟子にして『日本刊本写本書目』を著したホフマンである。現在同大日本語講座教授は、ホフマンより五代目の W. J.

Boot氏である。私は二〇〇六年一〇月、ライデン大学に於いて親しくBoot教授に謁し、直接に氏からオランダに於ける日本史研究の現状を伺うことが出来た。

オランダに於ける日本史研究者は、なんといってもライデン大学が中心だが、他にも若干の研究者がいる。北方のフローニンゲン大に第二次大戦中のインドネシア史および日蘭関係を専攻する女性研究者が、ナイメーヘン大文学部に一人おられるが、この二人は日本語読解に難があるとの由であった。アムステルダムの二大学には、やはり日本語を能くする研究者はいない。ただ、同市の戦争資料館に、日本語を解する研究者が一名いるとのことである。

さて、Boot教授は、日本でもよく知られている近世思想史の研究者で、京大に留学し、江戸思想を京大教育学部の本山幸彦教授の下で、古文書学を同大文学部の大山喬平教授の下でそれぞれ学ばれた。Boot氏の元来のテーマは前注(二〇)にある如く家康神格化の問題であったが、広く江戸の儒学史を専門とし、近年は国学者荷田在満(春満の甥)の知識と論理に関心を有しておられるという。⁽²¹⁾

次に、ライデン大日本学科の動向について。元来同学科には一三人の日本研究者の定員があったが、二〇〇四年の改革で八人に減員された。その八人の内訳は、正教授が①Boot氏と②Goto=Jones(現代日本史)の二人、助教授以下の六人は、③中世文学(和歌、漢詩)④現代映画⑤仏教史(真言宗、覚鑿)、⑥現代インドネシア占領

史⑦空席(選考中)、⑧日本語、ということになっている。以上の①②③④⑤⑥を通過すると、④⑤の研究にみられるように、やはりアメリカ、フランスに於ける新傾向の一端がオランダでもみられるという感もあるが、やはりオーソドックスな視点から、バランスをとって人事が行われているという気もする。⁽²²⁾ライデン大学内には、別に日本の美術史の専門家が二人(博物館学、浮世絵)おられるとのことである。

さてここ十数年来の動きであるが、Boot教授の談では一九九一年の天安門事件直後、中国語生徒が激減し、日本語学生が急増した事態があったそうだが、それが落ち着いた後は、日、中半々で、両語の専攻学生がほぼ拮抗しているという。

(四) ドイツ

この国はオランダに次いで日本史研究の永い伝統をもつ。明治中期に福田徳三が、ドイツ歴史学派のカール・ヒューヒャー、ルーヨ・プレントナーの下でドイツ経済史を学び、後者の勧めで『日本経済史論』をドイツ語で著したのが一九〇〇年、ランプレヒトがライプチヒ大学夏季学期に日本史を講じたのは一九一〇年である。⁽²³⁾なおK・マルクスやM・ウェーバーが日本史について論じていることは周知に属する。このような日本史研究に関し伝統あるドイツであるが、今や急激な大学改組、改革が行われ、その日本研究諸講座も曲

り角にあるという。以下の報告は、専らM・リュッターマン氏の詳細かつ広汎なドイツに於ける日本史学界事情観察を、筆者の乏しい理解で聴取した結果である。

まず、ドイツ日本学の現状について、研究者名、大学名、専門分野の順で通観してみる。

- Roland Schneider (ハンブルグ大) 日本語学、幸若舞の研究 (退)^{*}
 Jörg B. Quenzer (同) 仏教、近世文学
 Manfred Pohl (同) 現代政治、日本共産党史
 Eikehard May (フランクフルト大) 近世文学 (退)
 Wolfgang Schamoni (ハイデルベルク大) 近代文学 (退)
 Klaus Antoni (チュービンゲン大) 神話学、近代に於ける記紀神話
 Klaus Kracht (フンボルト大) 近世思想史 (朱子学)
 Johannes Laube (フンボルト大) 近代哲学 (退)
 Hans A. Detmer (ボーフム大) 律令財政史 (退)
 Regine Mathias (同) 炭坑労働史
 Carl Steenstrup (フンボルト大) 中世法制史、貞永式目、分国法
 Peter Pörtner (同) 近代哲学 (西田幾多郎)
 Klaus Vollmer (同) 中世文学、職人歌合
 Christoph Kleine (同) 宗教史
 Erich Pauer (マールブルク大) 近代経済技術史 (高炉)
 Klaus Müller (デュッセルドルフ大) 近世農書の研究 (退)

Michiko Mae (同) 女性史、ジェンダー

Franziska Ehmecke (ケルン大) 近世農書の研究、美術史

Peter Ackermann (エールランゲン大) 音楽史

Martina Schönbein (ヴュルツブルク大)

Stanca Scholz-Cionca (トリエル大) 能、狂言、歌舞伎、芸能史

Hilaria Gössmann (同) メディア・ポピュラーカルチャー

Nelly Naumann (フライブルグ大) 神話学、民族学

Josef Kreiner (ボン大) 民族学 (沖縄、アイヌ) (退)

Kay Genenz (同) 言語学、方言

Detler Taranczewski (同) 中世荘園史 (関東)

Peter Pantzer (同) 外交史、岩倉遣欧使節

Sepp Linhart (ウーレン大) 近世近代社会 (社会学的接近)

Irmele Hijiya Kirschner (ベルリン自由大) 近代文学

Steffi Richter (ライプチヒ大) 明治思想史

Gesine Fojanty Jost (ハレー大) 近現代教育史 (学校、児童)

Reinhard Föllmer (エルフルト大) 日本史、東洋史

^{*} (退) は現在は退職していることを示す。

以上の研究者、テーマ等を通覧した印象では、やはりドイツ的特色が出ているように思われる。それはごく一部にジェンダー史、メディア史のようなアメリカで注目されている分野の研究者もあるが、大方はオーソドックスな、正統的分野が目立つ。従ってアメリカと

は学界状況はかなり差がある、というか、新奇な主題は研究者が飛びつくような事情ではないと言えよう。

さて本項の冒頭で言及した曲り角の事情とは、一九九九年にEDU諸国文相会議で申し合わされたボロニア宣言に伴う学制改革で、バチュラー(学部卒業者に学士の学位を与える)制の導入による一連の改組が進行中であるという。日本学、日本史研究にそれがどうい影響があるかという、東洋学、アジア学等の学科の下に日本学が包接されてしまい、日本学、日本研究の独立性が脅かされ、低下し埋没してしまうという恐れが出ているという。これら一連の改革で、オランダの項で触れたように、日本語学習の学生数と中国語学習の学生数が拮抗し、中国語学習者の増大を背景に、中国関連講座が日本研究部門よりも有利になる状態が現出しているという。現に、オーストラリアでは、第一外語の地位に安住してきた日本語が中国語の追い上げにより、すでに逆転されているという。メルボルン大、西オーストラリア大では中語講座が新設され、シドニー大でも教室新設の動きがあるという。その背景には、中国政府の国家プロジェクト「孔子学院」の存在があり、中国政府は全世界で二五〇〇万人の中国語学習者を一億人に増やす計画を立て、膨大な予算を注入しているという。²⁴この動きがドイツにも影響を与えているようで、既出の各大学の日本研究講座のうちで、デュッセルドルフ大、フライブルグ大のように、教授の後任が取れず、日本関係講座の消滅が続

出しているという。

むすびにかえて

当初の予定では中国も対象としていたが、時間的余裕がなく、本稿では割愛させていただいた。別の機会があれば、中国に於ける日本研究にも触れたい。さて、きわめて不十分な短期間に於ける以上欧米四ヶ国の日本史研究の現状を通覧したところでは、国により共通点とともに差異もみられる。質量ともに研究者が豊富なのは何といてもアメリカで、日本での流行、趨勢にも敏感であり、研究者が絶えず日本に來訪し、情報を仕入れていることがうかがえる。一方、フランスでは、東洋学の蓄積と厚みを生かし、裏社会や修驗、陰陽道等々、掘り下げた文化宗教面の研究が注目される。なお米欧とも、研究手法のレベルは向上しており、日本人研究者と同様に邦文の根本資料を使って論文を書く人が増えている。一方、オランダ、ドイツは日本研究に永い伝統を持つが、近年、中国研究に押され気味であり、日本関連の講座数も減少傾向にあり、今後の見通しは必ずしも明るくない。国際交流基金をはじめ、抜本的な対策が望まれているところである。

注

- (1) Baxter教授の御教示によれば、Brown氏は加賀藩制史、同藩土地制度史が専門で自ら『Early Modern Japan — an Interdisciplinary Journal』という年二回刊の学術誌を刊行されている。ただし、この誌は最近電子媒体となり、紙面での刊行は中止された由である。
- (2) Molony女史は、元来二十世紀前半、つまり戦前日本の経済史産業史が専門であった由(Baxter教授の回想)である。それが、このようなジェンダー研究に傾いておられる点は、アメリカに於ける最近の日本史学の変貌の一典型と言えるのかも知れない。
- (3) 論文として『Birth-Giving and Avoidance Taboo — Women's Body versus the Historiography of Ubuya』がある(Baxter教授前掲論文)
- (4) ニューヨーク市立大。Barlana J. Bookes教授の研究は、日本の植民地に於ける戸籍を調査分析し、混血の問題を論じている。要するに結婚等人よる内地と外地の混交交流をどう考えるかといった微妙な問題を扱っておられるようである。このような視点は、国内の研究では取り扱いが難しく、ある種のタブーもあつて充分に行われていなかったようである。
- (5) 同様の趣旨は、P. C. Brown教授も、近世史研究に関して「研究者の日本語能力が増し」「一次史料、及び絵画や文学が積極的に利用され」「日本語で論文を発表する研究者がでてきた」と積極的に指摘されているところである。
- (6) J・F・モリス氏「アメリカにおける日本近世史研究の現状」
- (「日本史研究」三四〇号一九九〇年二月) フィリップ・C・プラン、谷口眞子両氏「アメリカにおける日本近世史研究の動向」(前掲『日本史研究』四五三号) アン・ウォルソール氏「アメリカにおける日本近世史研究の流れ」(青木美智男・保坂智両氏編『新視点 日本の歴史』五、新人物往来社刊 一九九三年七月刊)
- (7) 近世史の分野で専門家の多い思想史については後述する。
- (8) ウォルソール氏の総括によれば、一九九二年ワシントン大学に於ける学会大会場で百姓一揆の過程を「中古車販売にたとえて見る」若手学者のエピソードが揶揄的に語られており、アメリカに於ける一揆研究の困難さ、問題点が指摘されている。なお、H. Ooms氏もこの点について「一九八五〜八六の二年間の短い期間の内、四点もの『一揆』に関する研究が現れた。それ以降はわずか二点の研究が後続しただけである。」「アメリカにおける江戸思想史の三十年を顧みて」出典は後掲)と指摘されている。
- (9) Herman Ooms, *Tokugawa Ideology: Early Constructs, 1570-1680* (Princeton: Princeton University Press, 1985) 邦訳『徳川イデオロギ』(ペリかん社 一九九〇年)
- (10) H. Ooms, *Tokugawa Village Practice: Class, Status, Power, Law, Berkeley and Angeles, CA, University of California Press, 1996*
- (11) オームズ教授の談では、根本史料の英訳も進み、徂徠の作品等は大半英訳されているとの由。古代史料も『先代旧事本義』が言語学者の手で英訳されたそうである。しかし、英訳史料が増えたにもかかわらず、「皮肉なことに」学生達の関心は減退してしまった

とOoms教授は慨嘆しておられる(同氏前掲「アメリカにおける江戸思想史の三十年を顧みて」)。

- (12) *The Gates of Power - Monks, Couriers, and Warriors in Premodern Japan*, University of Hawaii Press, Honolulu
- (13) 彼女の名は *The Emergence of Japanese Kingship*, Stanford University Press, 1977ほか、幾つかの古代王権論に関する業績がある。
- (14) このような傾向は、やはり儀礼を含めた宗教関係が過半を占めるといふ最近の日本中世史研究の動向(例えば『史学雑誌』の恒例の「回顧と展望」号、科研費の採択状況の概観)をみても、日本の学界と共通する現象とみられ、日本からの影響を認めない訳にはいかならぬ。
- (15) この部分は、フランス語からの翻訳ではなく、ハイエク君自身による日本語文である。念のため。
- (16) 筆者の学生時代、パリと京都が世界学界で東洋史研究の二つの中心と言われていた。
- (17) Publication de l'IEPHE, Sciences Historiques et Philologiques, Genève, Droz, 2004
- (18) Arles, Editions Philippe Picquier
- (19) Collège de France, *Institut des Hautes Etudes Japonaises*, 2004. (Diffusion De Boccard). 197p
- (20) 例えばW. J. Boot「徳川家康の神格化をめぐる」(本山幸彦教授退官記念論文編集委員会編『日本教育史論叢』思文閣出版一九八八年)の論文は、辻善之助博士や朝尾直弘氏の見解に鋭い批

判を浴びせた研究として、日本で高く評価されている。詳しくは曾根原理著『徳川家康神格化への道』(吉川弘文館、一九九六年)等参照。

(21) Boot氏の最も傾倒する日本の研究者は尾藤正英氏との由。丸山真男には批判的で、Boot氏の学風は着実なる実証研究であるとみられる。日本の近年の思想史学界の傾向、例えばフランスのポストモダンの影響を受けた言説には懐疑的なようであった。

(22) 当方の希望で、教授への聴取には、日本語の出来る大学院生二人も加わってもらった。この両君はBoot教授の弟子で、一人は江戸思想(中江藤樹ら忠孝の研究、今一人は明六社(加藤弘之ら)を研究しているとの由であった。後者の院生(女性)は高校生時代、日本にホームステイの経験があったという。この両君の話に、一般の学生はアニメ、コミックにやはり興味を抱いており、その関心で日本語を学ぶ者が多いとの由であった。

(23) 牧健二著『近代における西洋人の日本歴史観』清水弘文堂刊、一九五〇年六月

(24) 「孔子学院」の動向については、日本経済新聞二〇〇六年九月二四日付三面「けいさい解説」欄に「孔子」世界を駆ける」として紹介されている。中国国務院に於いて二〇〇四年、国家戦略「漢語橋工程」が策定、実施部門に「国家対外漢語教学指導小組弁公室」が設けられ、アジア、アフリカ、欧州が重点地域になっているという。